

令和2年7月30日

二宮町教育委員会議録

(定例会・臨時会)

二宮町教育委員会

1 開会時間 9時30分

2 閉会時間 13時00分

3 教育長名 森 英夫

4 署名委員 野谷 悦

5 教育長及び委員

出欠席	職名	氏名
○	教育長	森 英夫
×	教育委員 教育長職務代理者	山内 みどり
○	教育委員	岡野 敏彦
○	教育委員	渡辺 優子
○	教育委員	野谷 悦

6 出席者氏名

教育部長	黒石 徳子
教育総務課長	下條 博史
生涯学習課長	小笠原 純二
教育総務課長代理	田中 明夫
教育総務課指導班長	境野 朋美
教育総務課教育総務班長	岩崎 稔史
教育総務課教育総務班主任主事	渡邊 一充

7 傍聴者 16名

8 調整者 教育総務課教育総務班主任主事 渡邊 一充

1 開会宣言

(教育長) 令和2年度7月定例教育委員会議を開催します。

2 署名委員の氏名

野谷委員を指名する。

3 教育長事務報告

(教育長) 教育長事務報告を資料に基づいて行う。

(教育部長) 7月政策会議報告を資料に基づいて行う

(各課長) 各課の事務報告・事業予定について資料に基づいて説明する。

4 付議事項

(1) 議案第6号 令和3年度小学校使用教科用図書採択について

(教育総務課長・指導班長) 令和3年度小学校使用教科用図書採択について資料に基づいて説明

- (岡野委員) 来年度の小学校の教科書を継続して採択するにあたり、教科書会社の存続等といった継続性に関して、何か支障があるようなことはありますか。
- (指導班長) 現在、継続性に支障があるような情報はございません。また、小学校で使用していて、特段支障があるとは聞いていません。

(教育長) 委員に議案第6号について諮る。

委員全員賛成により、議案第6号は承認される。

(2) 議案第7号 令和3年度中学校使用教科用図書採択について

(教育総務課長) 令和3年度中学校使用教科用図書採択について資料に基づいて説明

(指導班長) 教科用図書の採択について、これまでの経過を報告。

(教育長) 各委員に種目ごとに諮る。

[国語の国語について]

- (野谷委員) 「光村」一点で推していきたいと思います。理由としては、国語科において、まず作品が優れていること。2番目に、それを読み取るための手立てがしっかりしていること。3番目に、それを通じて国語力、認識力が高まっていく手立てがしっかりしていること。そのどれをとっても、「光村」が優れていると考えました。
- (岡野委員) 県の調査結果と二宮町の採択委員会、そして自分で読み込んで調べた結果、「光村」か「東書」、「教出」あたりが良いのではないかと思います。今回、中学校の教科

書を読むにあたり、昨年の小学校の教科書と比較しました。全体を通して基本的な思考のレベルが一段上がり、またボリュームも増えていました。やはり教科書の中身を一つ一つ精査をしていく、あるいは授業の中でステップバイステップで着実に実行していくことが大事だというのが第一印象でした。特に最近の子ども達は読み解く力が弱い、充分で無いと言われることがあります。文章をきちんと読み解いていくこと、文章の全体像を捉えていくこと、流れを読み込むといったポイントを押さえられることが大事であるという視点で比較しました。どの教科書も1年生の導入から3年生のところまで急にレベルが上がっています。ただし、二宮町には小中一貫の考えがあるため、小学校から中学校への流れがスムーズかという意味で、1年生の導入がどのようになっているか、言葉をしっかりと大事に扱い、着実に身に着けていくためにはどうすればいいかという視点で読みました。それぞれの教科書会社には特徴がありますが、「東書」は1年生の導入が非常にソフトな印象がありました。それと「学びの扉」という項目の構成がすごく良いなと感じました。3年生になると「言葉の学習」で、新しいアイデアと斬新なアイデアの言葉の違いは何かをしっかりと考える視点がありました。そういった一つ一つの言葉をじっくり考えていく単元の構成が、すごく良いなと感じました。次に「教出」は、学年ごとにカラーが決まっていて、学年が進んで行く度に成長していると、子ども達自身が実感できるのではないかと感じました。一番特徴的だったのは2年生の、台詞とト書きの違いについて、じっくり考える単元があったことです。ここも言葉の一つ一つを丁寧に、その意味も含めて子ども達が考えていくステップが生まれていると感じました。最後に「光村」は、1年生の教科書の冒頭に、「さあ、友達を増やすように言葉を増やしていこう」という投げかけの言葉がありました。やはり最初のステップで、子ども達にこれから何をするのかというイメージがしっかりと伝えられている印象を受けました。加えて、比喩で広がる言葉の世界や、思考の可視化、具体化と抽象化等といったことを、単元の中でしっかりと踏み込んでいくことが出来る教科書だと感じました。また、星の王子さまの翻訳が2種類あり、それぞれの訳者によって捉え方や表現の仕方が異なることが、具体的な事例として記載されており、ものすごく子ども達に浸み込むことが出来るような印象を受けました。検討委員会のコメント等も含めて考えると、「光村」が中では一番適していると感じました。

- （渡辺委員） 国語は全ての教科のベースになるものであって、「豊かな感性を身に付けること」と「論理的思考を養うこと」、その両輪のバランスがとても重要だと考えました。良いと思った1つ目は「東書」です。導入に「学びの扉」という漫画での問い掛けがあります。そこではっと子ども達が感じて、その先にある学びを支える「言葉の力」というところにいくと、問い掛けに対する細かで丁寧な説明があり、非常に学びやすく、入りやすいと感じました。後半部分の「言葉の力」も読み応えがあって、すごく良いなと思いました。「三省堂」は、採択検討委員会でも、何を学ぶかという目的がすごく分かりやすく読みやすいという意見もあり、確かにそうだと思います。最後に、「光村」では「思考の地図」と「具体的な思考のレッスン」というものがあり、それが3年間継続して載っている

ます。言葉の本質を読み取り、豊かな感性と論理的思考力を使って国語を学ぶことで、これからの未来や社会に繋いでいくプロセスがよく見える構成になっていて、各社の中で非常にレベルが高いと感じました。深く読み込んでいくことや読み取ることが難しい、最近弱まっている等の話がありますが、そういった状況での子どもたちには少しレベルが高いと言わざるをえないかもしれません。ただ、中学生はアイデンティティを形成する途上でもあるため、本当にたくさんの良い物語や文章に触れて欲しいと思います。そのような意味でも、「光村」の要所に表れている読書のすすめや本の紹介のような部分は、本当に感性を刺激する文章が多く、質が高いと思ったため、最終的には「光村」が良いと思いました。

(教育長)「光村」の意見多数を受け、各委員に国語の国語「光村図書出版」について諮る。
委員全員異議なし。

〔国語の書写について〕

- (渡辺委員) 書写も4社出ていますが大きな特徴として、サイズがAB判とB5判の2種類に分かれています。書写は、お手本を机の上に並べて書くので、なるべくコンパクトになるB5判サイズが良いと思いました。B5判の「光村」は縦に広げると、半紙と同じくらいのサイズになり、机の上に並べる時も邪魔にならずに、大きなお手本が見られるようになります。そのような構成が「光村」は良いと思いました。また、文字の豊かさも非常に多く紹介されています。文字のデザインやユニバーサルデザインの書体等、綺麗に文字を書くだけではない文字の豊かさにも触れており、書写も「光村」が良いと思いました。
- (野谷委員) 渡辺委員から、B5判の教科書は、子ども達の机の大きさからして小さく、そして使う時に広げると、お手本が実際に使用するサイズと同じになる点で、使い勝手が良いというお話がありました。それに加えて、筆順についてもそうです。どの教科書も触れてはいますが、「光村」はお手本と同じページの右上に小さく書かれています。つまり書きながら見る時に、同ページ上にあるため一つの目線で見ることができ、すごく良いと思いました。二宮町もタブレット端末が導入されましたが、何よりもこの一つひとつの題材全てにQRコードを活用したお手本が示されています。他者を圧倒しています。国語の先生は専門とはいえ、なかなか十分に自信を持って教えることのできる先生は少ないと思います。また、生徒一人ひとりでも確認が出来るということは、何よりもすごいと思います。総合的に「光村」を推していきたいと思います。

(教育長)「光村」の意見多数を受け、各委員に国語の書写の「光村図書出版」について諮る。
委員全員異議なし。

〔社会の地理について〕

- （岡野委員） 社会科に関しては地図もありますが、地理と歴史、公民それぞれが三位一体だと思いました。地理は空間の広がり、歴史は時間の広がり、公民はお互いの関わり方というような3つの視点で見た時に、それぞれの役割があると、最初に感じました。地理は、国際感覚を身に付けるためのステップと思うので、やはり他の地域の特色をどれだけきちんと捉えているかという視点で読みました。3つの科目に全て共通しますが、自分が社会の一員としてこれから参画していく所に、どれだけ向けていけるのかが大事な視点だと感じました。そのような視点から、地理は、「東書」と「教出」、「帝国」の3つが良いと思います。先程の国語と同様に、1年生の導入時がどのようなになっているかを調べてみました。例えば、「教出」は、「地理を始めよう」、「小学校との違い」、「中学校における3つの分野」がしっかりと記載されており、そこから18歳に向けて、勉強したことの目標みたいなものが具体的に示されています。18歳は、これから成人に踏み込んでいくところですし、選挙権が与えられるため、一つの大きなステップという捉え方をしているのが良いと感じました。目標を具体的に見せ、そこに向かって行く方向性を示している導入部分が良いです。一方、「帝国」は、地理と歴史、それから公民の三者の関係が図解で示されています。この3つの科目がどのような関係になり、自分たちはこれから何を勉強するのか、しっかり表現がされています。「東書」や「日文」も同じような表現をしており、見せ方ではその2社がすごく良いと感じました。地理は、国際的な問題や世界の状況等、これから自分たちはどうするのがしっかり見えるものが良いと感じました。領土の問題についてもそれぞれ表現があります。「教出」の最後の文章が、「平和的な解決が重要である」と載っているところが、やはり一番大事な部分でもあると考えました。その一方で、例えばアジアやアフリカで、今何が起きているのかがきちんと単元として取り扱われているのが、すごくポイントだと思いました。そしてインドやアフリカの教材に出ていたルワンダの例で、情報化技術がかなり進んでいて、しかもその理由がきちんと書かれています。特にインドに関しては、元々英語圏の文化が根付いているということと、今までの長い歴史との関わりが影響している、特にカースト制度や、今までの文化や歴史がそこに影響しているということが記載されているので、「帝国」と「日文」も良いと感じました。アフリカは、特にここ3、4年で劇的に変わっているところがあります。電話回線が引かれる前に携帯電話の基地局が出来てしまうため、スマホ等が先に進んでいるのが特徴的なことだと思います。そのような特徴がきちんと単元の中に盛り込まれているというのが、一つのポイントだと感じました。時間のところでは、自然災害や地域の課題等をどのように扱うかということも、ポイントの一つになるのかなと思います。そういった地域の課題を考える際の、考えるプロセスを丁寧に説明し、単元の中で扱われているのは「帝国」でした。「東書」も災害時の中学校のボランティアや、ハザードマップの大切さ等がかなり丁寧に表現されている部分もありましたが、やはりそういった視点で見た時に、総じて「帝国」が良いと感じました。

- （野谷委員） 第1に「帝国」、第2に「教出」を推したいと思います。「帝国」は何よりも、子どもの興味関心を引き出す教科書だと感じます。具体的には、各地方の冒頭についている絵地図だけで、教室の子どもが1時間しっかりと楽しめるところです。裏のページには、絵地図に応じた写真が補充されていて、そこから子ども達が興味を持てるというのが、「帝国」の素晴らしいところだと考えています。捨てがたいのは「教出」で、領土問題のところで岡野委員の発言もありましたが、文科省の記述とほとんど一緒ですが、最後に、「各国に問題があるけれども、各国が冷静に問題に向き合い、対立を乗り越えて平和的な解決を目指すということが重要です」という一文があります。学習はやはり一方の視点ではなく、複数の視点があった方が良くと思います。学習指導要領の主体的、対話的で、深い学びにつながるためには、それは必須だと思います。そのため領土問題に関わらず、宗教対立、民族問題、アメリカの人種問題等、具体的に述べられているということで、捨てがたいと思います。ただ、教員出身の身からすれば、子ども達と一緒に楽しい授業をつくる視点から、「帝国」に傾くかなと思います。
- （渡辺委員） 4社とも非常に良い教科書だと思いました。例えば「日文」は、少し他社と違うユニークな視点がありました。イヌイット等の様々な少数民族、ニュージーランドの公用語の一つには手話があること等、他の教科書にはない視点の掲載があつて良いと思いました。結論的には、「教出」か「帝国」で迷っています。「教出」は4社の中で、非常に情報の扱い方が丁寧で良いところだと感じました。小学校から中学3年生までの社会科全体の見通しを最初に示しています。先程の領土問題の話も出ていましたが、そういった人道的視点、多文化共生観、宗教観、領土問題等、一つ一つ本当に主体的に子ども達に考えさせる、取り組ませるような投げかけ方の文章になっています。また、各章の学習の振り返りの特設ページも、「地域から世界を考えよう」と6テーマが掲載されていましたが、その内容も良いと思いました。「帝国」に関しては、本当に情報が幅広く多いのですが、上手くまとまっています。一見広く浅い印象のようですが、良い意味でバランスが良く、教科書を本当に幅広く学べるところが良いです。それから、やはり地図等に強いので、地図や地形図がすごく見やすいです。あとは技能を磨くという部分が随所に散りばめられており、QRコードもしっかり配置されています。スキルを磨くというところも、非常に質が高いと思いました。
- （野谷委員） 追加で、山内委員から、「日文」の地球儀の使い方が優れているところが良いという話がありましたので紹介します。

（教育長）「帝国」の意見多数を受け、各委員に社会の地理の「帝国書院」について諮る。
委員全員異議なし。

〔社会の地図について〕

- （野谷委員） 「帝国」だと思います。様々なノウハウが蓄積されています。判が大きく、

例えば関東地方を学習する前には、絵が1ページに掲載されており、イラストもしっかりして、見やすくなっています。また、時事問題にも対応しており、例えば、エルサレムの旧市街地の地図や外国人の移動、森林の減少等についても、しっかりと今問題になっている言葉が出てきています。まさに資料集としても価値があると思います。それからQRコードが充実していると考えています。NHKのアーカイブ等のリンクがきちんと対応されていて、本当に授業が充実すると思いました。

- (岡野委員) 地図は「帝国」が良いと思います。判の大きさもそうですが、その単元で主役になる地図において、見通しがきき、また見晴らしが良く、やはりそこが一番のポイントだと思います。世界地図に関しても、世界に目線移した時に同緯度、同縮尺の日本の位置が必ずあって、日本に対してどうかという相対関係が見やすい点も良いので、そのような部分もポイントになると考えました。
- (教育長) 検討委員会の報告でも、「東書」と「帝国」では、「帝国」の方が良いと意見をいただいています。
- (渡辺委員) 「帝国」が、大判サイズで見やすいと思います。中学校では社会科の教科書がたくさんあるので、地図ではシンプルに地図の見やすさという視点で見ました。さらに、大判であっても軽いところがポイントだと思いました。

(教育長)「帝国」の意見多数を受け、各委員に社会の地図の「帝国書院」について諮る。委員全員異議なし。

[社会の歴史について]

- (岡野委員) 歴史について、高校の学習指導要領がどのようになっているのかを着目しました。来年度の学習指導要領で一番科目の再編が大きいのが社会科で、近代史が中心になっています。そのため、やはり幕末から前の歴史と、幕末を挟んだ後ろの歴史の、大きく2つのポイントがあると感じました。前半に関しては、やはり歴史の流れをしっかりと捉えていくこと。何年に何が起きたかというよりも、何故そのように変化していったか、その時代の特徴をしっかりと押さえるのが大事だと思いました。後半については、世界の中で日本がどのように位置付けられ、世界とどのように関わっていくかという近現代史の部分がポイントになると感じたので、その視点で比較しました。結果として、歴史はどれもすごいと思いましたが、「東書」、「教出」、「帝国」、「日文」の4つだと思います。教科書の各ページに歴史のスケールが掲載されており、縦書きや横書きと、いろいろなバリエーションがあります。やはり自分が今勉強しているのがどの部分なのか常に意識していく事が、すごく大事なことだと感じました。歴史スケールがきちんと掲載されているのが、一つのポイントだと思います。また、歴史をきちんと俯瞰して見ることもポイントだと思います。特に導入の部分で、中学校1年生が小学校で勉強してきたのはどんなことを一望できる視点も良いと感じます。それらの視点から、歴史がきちんと見やすいのは

「東書」と「帝国」の2つです。それから、子ども達が関心を持つという意味では、その単元のタイトルも重要だと思います。戦後のところで、「クリスマスまでには帰れるか」という第一次世界大戦に出兵する兵士たちの目線から見た言葉が書かれています。やはり、その単元のタイトルの付け方が一際特徴的だったのが「教出」です。歴史を考える時のポイントがいくつかあることを各会社が言っています。時系列の流れ、他の時代との比較、それから推移、時代の転換等の着目点を、しっかりと学ぶような構成になっていました。そこが「帝国」、「日文」、「東書」、「教出」の4社が特に際立っていました。特に「日文」は、歴史のポイントが、見開きに大きな枠で明確に示してあり、しっかりと分かる構成になっているのがポイントだと思いました。各会社で、歴史の考え方がいろいろな方法であります。例えば、「東書」は、考え方のプロセスを様々なチャートの形で示し、単元ごとに違う考え方を導入しているので、いろいろな視点で考える必要性の意味では、すごく優れていると感じました。「帝国」では、単元の冒頭にその歴史を象徴する見開きの大きな絵が出ています。やはりその時代の特徴を表すことを考えていくうえで、絵を見てその時代の特徴を押さえる意味では、謎解き感の要素も含め、そのような構成は本当に良いと思いました。最後に着目したのが、3年生の最後の単元がどのような構成になっているのかです。ここでは「教出」または「帝国」が良いと思います。最後の単元の構成が、世界との結びつき、技術進歩の恩恵、新たな課題、環境エネルギー等、転換期と共存というキーワードが、しっかりと単元の中に盛り込まれています。中学校を卒業して、その先に進んでいくにあたり、最後の単元の意味はすごく重要だと思います。これから先の日本を考えていくうえで、やはりこういった視点が一番大事だと感じました。政治や経済も、勿論大事だと思いますが、やはり自分がどのように振舞うのかを考える構成になっているため、ここは「帝国」が優れていると感じました。

- （野谷委員） 「教出」と「帝国」を推したいと思います。大体の教科書は学習課題、確認、表現といった手順ですが、「教出」の学習の手順はその中身が具体的です。例えば理解を確かめる時は、内容が読み取れているか例示を挙げさせる等、手立てがしっかり示されているので、子ども達が学びを確かなものにするためのノウハウがしっかりしていると思いました。また、終戦時の写真や資料を見比べてみると、犠牲になった人たちに寄りそった写真や記述が多いと思います。洞窟に火炎放射器で攻撃するアメリカ兵、投降した日本兵、原爆ドーム、広島キノコ雲、ラジオで玉音放送を聞く人々や日本の家族との再会を喜ぶ残留孤児等、犠牲になった人に寄りそう視線がしっかりしており、「教出」が良いと思いました。2番目に「帝国」ですが、これは本当に授業で子ども達が飛びつく内容になっています。「タイムトラベル」のトピックが各時代に記載されており、それが秀逸だと思います。しっかりと設問が用意されており、ただ見ただけで終わらせない確かな腕を感じました。資料についても、先程の犠牲になった者に対する寄り添いもしっかりしているという意味で「教出」、それから「帝国」も素晴らしいと思いました。
- （渡辺委員） 歴史は全部で7社あり、特に明治時代以降の近代の記述は、各社いろいろ

な差があって、興味深く読ませていただきました。歴史は、時系列で何が起きたのかという暗記する教科のように捉えてしまうところもありますが、全体を見て、日本がどのような社会を歩んできて、今後どのように生かしていくかに結び付けられる教科書が良いと思ったので、「帝国」が良いと思います。「タイムトラベル」という導入の部分が少しゲーム感覚になっていて、入り方がすごく面白いです。それに加えて、未来に向けての人権コラムの内容や、多面的多角的に考えてみようという内容構成等も良かったです。それと意見としてはあまり出ていないのですが、「山川」の他社にない深い部分の知識がしっかりと網羅されているところや、用語解説もなかなか無い言葉があって非常に良かったです。しかし各社と比べると文字が小さい部分があるので、全ての中学生にとっての扱いやすさで見ると、少し使いにくいと感じました。そのような意味で読みやすさ、見やすさ、導入のわくわくさせる感じといった意味で、「帝国」が良いと思いました。

(教育長)「帝国」の意見多数を受け、各委員に社会の歴史の「帝国書院」について諮る。委員全員異議なし。

[社会の公民について]

- (渡辺委員) 中学3年生で学ぶ社会科は、これまで学んできた社会科の集大成であり、様々な背景を持つ人々と合意形成しながら課題解決を目指していく、社会参画の意識を深めていけるかという視点で、各社を読み込みました。良いと思ったのが3社あります。1つは「日文」です。「明日に向かって」や「チャレンジ公民」の中で、論理的な主張のための理由付け、裁判のシミュレーション、シンキングツールの活用法等、実践的な内容が掲載されていて良かったです。「教出」については、地理と同様に丁寧な記述だとすごく感じました。特にメディアの活用や、メディアと政治の関わり方、メディアリテラシーについてしっかりとページを割いているのが印象的で、これからの社会の中での重要な視点であるので良かったです。「東書」も「みんなでチャレンジ」や「もっと公民」の中で、様々な視点で話し合い活動ができる例が示されていて、今の主体的、対話的で、皆で合意形成をしていくのに役立つと思い、この3社が良いと思いました。
- (岡野委員) 公民に関しては「東書」と「帝国」が良いと感じました。社会の3つの科目の連携という意味では歴史、公民、地理の全体像が見やすく、分かりやすく説明されているのが「帝国」だと思いました。小学校から上がってきて、考えるレベルを一段上げて合意形成をどうやってとっていくかが、中学校の公民の最初のポイントだと感じます。そこに向うための題材の取り方等も優れていると感じました。「東書」は、インクルーシブの視点や在宅勤務のあり方等の働き方の考え方についても、最近のトレンドや考え方を取り入れている部分もあります。やはり身近な部分で、新しい考え方に触れることが出来るという意味では、「東書」も良いのかなと考えました。導入の部分で、どのような題材を取り上げているか比較すると、「自分の町の様子から考えてみよう」という単元を各社

で取り扱っています。その中の話題として、「東書」は学校の中のトラブル解消を、「帝国」はマンションの総合問題を取り扱っています。大人でも尻込みするような課題ですが、そのような現実的に身近で起きていることを取り扱い、そこでどのように合意形成をとって社会が成り立っているのかがきちんと考えられる構成になっていると感じました。他者との関わりという意味で言うと、個人の尊重といった視点があります。「東書」には「違いの違い」という単元があります。人と自分の何が違い、違っていても良い部分といけな部分があるというのが、ここの単元のポイントだと思います。平等、権利や尊厳等に違いがあってはならないし、個性に関しては違って良い、むしろ違っていきという部分もあり、そのようなことをきちんと考えていく単元が特徴的でした。「帝国」で注目したのが、3年生の最後の課題です。課題を解決するための考えるプロセスがしっかりと掲載されているのが良いと感じました。最後のメッセージが、「夢を追い続けて」というタイトルになっています。「これから先に向けて課題はたくさんあるけれども、その中でも自分の夢を追いかけて前に進もう」というメッセージは、課題ありきで暗くなってしまうような印象ではありますが、その中で自分の未来を切り開いていこうという明るい兆しを感じる事が出来たので、「帝国」が良いと感じました。

- （野谷委員） 1番目に「東書」、そしてまた、「教出」も捨てがたいと思います。まず「東書」は、主体的で対話的で深い学びをするということです。それぞれの教科書がステップを追って子ども達に捉えさせていますが、その中で特徴的なのが「トライ」という項目です。例えば、町に問題があるという部分を述べた後で、S市の立場に立って条例をまとめてみようという取り組みがあります。また家計簿の分析をしてみようという取り組みもあり、思わず引き込まれて、自分の家計の分析をしてしまいました。子ども達の主体的な学びを引き出すアイデアも優れていると思いました。関連して、今課題になっているSDGsについてもそれぞれの教科書が触れており、私達の生活の中で優先度のスケールを示しながら話し合うという場面を設定しています。これも子ども達が積極的に主体的に考えるきっかけになるので、優れていると思います。「教出」が捨てがたいというのは、先程の領土の問題でも申し上げましたが、公平な視点という部分です。それは環境においても、資料の提示においても優れていました。他の教科書会社のほとんどが、二酸化炭素の国別の排出量のグラフを出しており、そのグラフだけだと現在排出量の多い国の問題と小さくとらえられます。大きな国が排出量1番になり、その国が悪いと受け取られてしまいますが、問題はそういうことではありません。「教出」だけは3つの観点から見えています。1番目に国別排出量の割合累積です。2番目に排出量の割合です。それから3番目に、国民一人あたりの排出量ということで、いろいろな面から見る事が出来ます。そして開発途上国についても、簡単にCO2の問題で妥協できないという問題もそこから浮かび上がります。資料の見せ方について公平性の観点から見ると、素晴らしいなと思いました。
- （渡辺委員） 「東書」も良いと思います。「皆でチャレンジ」や「もっと公民」というページで、様々な視点で話し合い活動が出来るところに非常に重きを置いている印象が

あったので、発展的だと思います。

- （岡野委員） ちなみに採択検討委員会は、公民に関しては「東書」でしたか。
- （教育長） 「東書」につきまして、検討委員会では、選挙の扱い等については模擬投票している様子、チェックアンドトライといったところが高評価を受けていました。

（教育長） 審議結果を受け、各委員に社会の公民の「東京書籍」について諮る。

委員全員異議なし。

〔数学の数学について〕

- （野谷委員） 1番に「東書」、2番に「啓林館」を推したいと思います。「東書」は会社
が大きいこともあり、特に動画のシミュレーションが充実していました。グラフやその変
化のシミュレーションを見ると、どんな場面なのかということが捉えやすく、言葉ではな
かなか伝わらないものが伝わるため優れていると思いました。また、数学の内容はほとん
ど変わりませんが、その出し方がポイントです。例題や問の色分けの問題の回答部分に、
ノートに横した線が引いてあり、どのようにノートをとったらよいかが示されています。
また、ヒントが水色になっているので、区別がしやすいです。学習者目線に立っていて、
これは使いやすい教科書だと思いました。「啓林館」についても大体は同じですが、どち
らかと言えば「東書」の方が使ってみたい教科書だと思いました。
- （渡辺委員） 数学は、二極化しやすい教科だと感じています。苦手意識の高い子どもで
も学びやすいかどうかという視点で見ました。「東書」、「大日本」、「学図」の3社の導入
の例題が、身近で生活に目立ったものが多く取り組みやすいと感じました。特に、「大日
本」は、数学の応用が身近なところに溢れていることが伝わりやすく、数学が役立つ場面
のイメージにつながるところが印象的でした。そして巻末には、様々なトピックの紹介が
あって良いと思いました。二宮町は今までずっと「啓林館」を使用していましたが、「啓
林館」は「自分から学ぼうという編」と、「力をつけよう、学びを生かそう」という2つ
のページに分かれています。それを生かす事例も掲載されているので、好きな子にとっ
てはどんどん取り組んで力をつけていける教科書だと感じています。苦手な子にとって
入りやすいと思う教科書の「大日本」と、力をつけていける教科書の「啓林館」と、両社
とも良いと思っています。
- （岡野委員） 渡辺委員のご意見のとおり、やはり数学は二極化しやすいです。好きな子
はどんどん行きますが、苦手意識が付いてしまう子もいるので、そこを両立させることが
一番のポイントです。数学の場合は式を一個一個覚えるというよりも、「知っている形に
置き換えてみる」「同じように考えてみる」「組み合わせでみる」という考え方の戦術みた
いなものが重要です。その意味では、「啓林館」が一番優れていると感じます。先程もお
話がありましたが、教科書が表側と裏側からの2部構成になっています。特に、裏側から
の2部構成の部分が際立っているように感じました。「数学的な考え方」という7つのポ

イントがしっかり盛り込まれているのが、1つの重要なポイントだと感じました。そして裏からの構成で1番のポイントが、各学年の単元の中身がそれぞれ掲載されているのですが、1年生だけその前に3つプラスされているところです。その3つが何かというと、「速さと道のり」、「割合」、「少数と分数」です。これは子ども達が苦手とする部分の三大要素であり、1番苦手な部分が集中的に出てきています。そのため、子ども達がどこに躓きそうなのかというのが、しっかりと捉えている印象を受けました。教科書の構成そのものが、苦手な部分を繰り返し丁寧に解きほぐしていく構成になっていると考えました。そこが「啓林館」の1番のポイントだと感じました。練習問題の構成についても、単元が終わった後の練習問題と章末問題、それから「学びを身に付けよう」というステップアップの幅も適切だと感じています。そして巻末の方に、高校入試問題の例も出ています。そこで学んだことが、実際に入試の問題でどのようなスタイルで出題されるのか、先の姿を少し見せる部分も盛り込まれているため、今学んでいることだけではなく、それが将来どうなっていくのか、どういう姿で進んで行くのかがしっかりと見える構成になっていると感じました。先程の渡辺委員のご意見のとおり、身近な問題が取り上げられている部分もあります。各単元の最初に、生活に則した話題が出てくるパターンと、単元の後ろに、日常的にはこんな問題はどうかというパターンと大きく2つあります。「啓林館」は後者のタイプだと感じました。単元の冒頭にあると、その単元に対する子ども達の興味が湧くと感じます。単元の後ろにあると、学んだことが生活の中の場面で役立つと、そこから先につながる印象を持つのかなと感じたので、その問いを単元のどこに置くかが大事なポイントと感じました。先につながる、予感させてあげられることが出来るのが「啓林館」だと感じました。その他の要素もありますが、少しずつ丁寧に解きほぐしていく感覚が一番際立っているのが、「啓林館」だと感じました。

(教育長) 審議結果を受け、各委員に数学の数学の「新興出版啓林館」について諮る。
委員全員異議なし。

[理科の理科について]

- (渡辺委員) 理科は5社の教科書があつて、1番良いと思ったのが「啓林館」です。良い点は、まず写真や絵をダイナミックに配置しているところです。配置しながらも非常にすっきりとしていて、内容や文章が頭に入ってきてやすいと感じました。また、「お料理ラボ」や「お仕事ラボ」等の化学コラムが随所に散りばめられていて、興味関心が広がりやすいです。また単元ごとに「基本のチェック」が巻末に掲載されていて、振り返りがスムーズに出来て、一つ一つ丁寧に進めていけると感じました。「学図」に関しては、理科のトリセツが巻頭に付いており、理科を学ぶわくわく感が伝わって良かったです。「大日本」も見開き2ページを使い、これまでに学習したこと、これから学習することを載せていて、細かい所ではありますが、整理しやすいと感じました。「東書」は教科書が斬新で、「新し

い科学」というタイトルの教科書になっており、従来の教科書のイメージがある各社と違い、非常にデザイン性が高く、若い世代のセンスが取り込まれているように感じられました。特に3年生の最終単元は、「科学の力を持続可能な社会をつくるために使おう」というメッセージが込められている内容です。3年間通した全体では「啓林館」が1番良いと思ったのですが、最終単元の構成は圧倒的に「東書」の伝え方が良いなと思いました。

- （野谷委員） 1番目に「東書」、2番目に「啓林館」、その他として採択検討委員会の「大日本」についてお話しします。まず「東書」は、形が変形になっていますが、そのことを生かしても見やすくなっています。実験も1ページ、あるいは見開きになっていて一目で分かります。実験等にもとても取り組みやすいと思います。それから単元ごとの「科学の本棚」では、この学習で学んだことや、何に繋がっているのかが分かります。それをきっかけに、学習に対する興味が広がる可能性があると考えました。動画も充実していますが、教科書のページの動画が見にくいので、見過ごしてしまう可能性もあると感じました。それに対して「啓林館」は、小学校の復習をQRコードできちんとフォローしています。単元ごとに「基本チェック」があり、復習にも使えて、力試しもあります。また動画についても充実していて、教科書にしっかりと動画の印もあるので、動画を手早く確認できます。そのような使いやすさの点では、1番に「東書」で、2番に「啓林館」だと思います。採択検討委員会の「大日本」への意見では、小学校からの振り返りがしっかりなされている、ということが挙げられていました。もう一つは解剖のところの図がとても見やすく、現場の目線に立っているという意見がありました。
- （岡野委員） 理科は「啓林館」が良いと思いました。理科の場合は、他の科目と少し毛色が違い、ダイナミックさやわくわくする感覚、謎解き感等がまず必要だと感じました。表紙のダイナミックさでも、「啓林館」の見栄えがすごく良いと思います。中に使用されている写真についても同様で、すごい写真がたくさん載っています。特に、氷砂糖が水の中に溶けていく様子等、結構驚くような印象のものもあり、やはり見た目のダイナミックさが優れていると感じました。各単元の中身については、理科の場合も一般化したり、抽象化するということが重要だと思います。モデルの絵や説明の仕方等がすごくシンプルに明確に描かれているのを感じました。水蒸気量の説明、物質の調べ方等においても、やはりモデルの絵をいかに子どもに見せるかが重要なポイントだと思います。去年か一昨年の学力学習状況調査等を見ると、理科の単元の中で子ども達が苦手な部分の1つに、「地震の波の取り扱い」、「P波とS波の仕組み」があり、その部分を比較してみました。P波とS波の波の伝わり方の計測から震源地を特定できることが書かれており、特定するための計算が1個ずつ丁寧に分解して考えているのが「啓林館」です。その部分にQRコードがついていて、波の伝わり方の実験の動画が非常に分かりやすいです。教科書会社によっては、例えば天井から吊るしたものを揺らして、波の伝わり方を比較しています。ただし、地震は地面を伝って横に伝わるものなので、きちんと伝わる向きも考えて実験の装置を、子どもに見せてあげることが必要だと感じました。数学の時もそうでしたが、「啓

林館」の中では、実験の誤差や四捨五入という考え方がすごく丁寧に、随所に出てきます。これは実際の会社の中で、実践で技術開発する中で大事なことでもあります。自動車業界で研究職をしている自身の目線で見ても、データの取扱い方やグラフの描き方等をしっかりと丁寧に、随所に説明の項目が設けられているのが「啓林館」でした。また、先程渡辺委員の意見にあった通り、最後の単元の更にその後に注目してみました。最後のページに「探求もフェアプレーで」があります。データ一つ一つに実直であって、決して異常なデータを見逃してはならない、実験や分析等をするマインドそのものが唯一書かれている教科書が「啓林館」です。すごく大事なポイントだと思うので、やはり単元一つ一つの丁寧さに加えて、マインドそのものを描かれているという点でも、「啓林館」が良いと感じました。

(教育長)「啓林館」の意見多数を受け、各委員に理科の理科の「新興出版啓林館」について諮る。

委員全員異議なし。

[音楽の一般]

- (渡辺委員) 音楽は2社ありまして、「教芸」が良いと思いました。3冊あるのですが、3冊とも巻頭に「音楽ってなんだろう」というコラムが掲載されています。最初の1ページ目のコラムが、音楽の本質をついているような内容で、3冊ともすごく良かったです。また細かいところでは、中学生は変声期があるため、どちらの教科書にも載ってはいませんが、「教芸」の方がより丁寧に記述があって、安心できる要素があります。「いろんなパートをやってみよう」の中に「指揮をしてみよう」があります。中学生では、結構合唱の機会もあって指揮やピアノ等は得意な子がすると思うのですが、「指揮をしてみよう」等にもしっかりページを使っています。また、学年が変わっても紹介があるところも、非常に良いなと思いました。
- (野谷委員) 「教出」を推したいと思います。小学校の教科書が「教出」なので、小学校の雰囲気と似ていて違和感がありません。また、QRコードが非常に充実しています。例えば、合唱曲では、歌っている様子だけでなく、曲の雰囲気に合った風景や建物が映し出されていて、この曲に取り組もうという気持ちが強く促されると思いました。また、高音部と低音部の対照もしっかりと出しています。音楽の先生は、それぞれについて練習させることがなかなか出来ませんので、子ども達の自らが学ぶことに配慮されているという点で、「教出」を推したいと思います。
- (岡野委員) 音楽については、取り扱われている題材そのもの、クラシック等もそうなのですが、やはり本物に触れさせてあげる機会があるという意味では、「教芸」の方が良いのかなと感じました。
- (渡辺委員) 採択検討委員会の中でも、現場の先生方からの意向で、「教芸」の実践的

な使い方の部分が使いやすいという声があります。また、大人になっていく過程の中学生に、本物の音楽や芸術というのをしっかりと見せていく教材設定が必要なのではないかと思いました。そういった部分では、取り上げるアーティストや写真の質等を含めて、「教芸」が良いと思います。

(教育長)「教芸」の意見多数を受け、各委員に音楽の一般の「教育芸術社」について諮る。
委員全員異議なし。

[音楽の器楽]

- (渡辺委員) 器楽も、先程採択した「教芸」と同じで良いと思います。違いを挙げるとしたら、ギターや打楽器の紹介があるのですが、取り上げている楽器の種類が多いという点です。また、ギターのコードが両社とも見やすく載っていますが、「教芸」の方は、イラストでどの弦をどの指で押さえるかまで載せている点です。写真よりもイラストにすることで、より見やすいと感じました。それらの点も含め、器楽も一般と同じ「教芸」で良いのかなと感じました。
- (野谷委員) やはり統一した方が良いと思います。

(教育長)「教芸」の意見多数を受け、各委員に音楽の器楽の「教育芸術社」について諮る。
委員全員異議なし。

[美術の美術]

- (渡辺委員) 小学校の図画工作から、中学校では美術の教科に発展していきます。小学校までは図工の中で表現する喜びや楽しさ、自由な作品づくりというのを取り組んできました。そこから更に深さを一步踏み込んでいく、本物の芸術を鑑賞する目等も養っていただけるような教科書が良いなと思って見ました。1番良いと思ったのが「光村」で、「美術とは何か」、「何を学ぶのか」という部分が分かりやすく載っています。生徒作品がたくさん載っている訳ではないのですが、つくる過程や心境等といったことが載っているところが特徴で、興味深いと思いました。そして、全体的に「光村」の美術の教科書は、芸術作品への敬意が感じられます。一つ一つの作品の載せ方、紙の質感や見開きの使い方等、そういった部分が随所に表れていて、感性が刺激される教科書だと感じました。また、「日文」は生徒の作品がたくさん載っています。同世代の子ども達のユニークな感性に触れるページがたくさんあって、表現する楽しみが広がっていく、わくわくさせる教科書と感じたのですごく良いと思いました。より深い芸術を見る目を養うという部分では、「光村」の方が良いと思いました。
- (野谷委員) 「日文」と「光村」を同じくらい推したいと思います。「日文」を推すのは、渡辺委員のご意見のとおり、生徒の作品が多く掲載されているからです。図工の専科

をしていた自身の経験からすると、同世代の子ども達の作品、またはその子ども達よりも少し上の作品がいくつか挙げられているので、子ども達が階段を一つ上がるのに適度なステップとなっていて子ども達の学びに即した教科書だと思うので、「日文」が良いと思いました。「光村」については専科の立場で言うと、学習のステップが示されているところが良かったです。授業時間で7～8時間連続して、一つの作品に取り組みます。つまり、作品の捉え方、構想の練り方、作品づくり、互いに作品の見せ合い等のステップが、毎回きっちりと示されています。子ども達は一回一回やっていると、何をしているのか分からなくなるので、ステップが明確に見えるという点は、美術の授業の特殊性に合った教科書だと思いました。さらに、最後の晚餐では、トレーシングペーパーを使用した一点透視の解説をしていましたが、その点も優れていると思いました。「日文」、「光村」が良いと思いました。

- (岡野委員) 「開隆堂」と「光村」で悩みました。美術は、絵を描いたり、物を作ったりといった自分の思いを表現する部分と、社会にどう役立つかという部分も大事だと感じます。工芸デザインという視点で見ましたが、町の標識やピクトデザイン、それから日常生活で使いやすいもの等といった機能美のような部分の単元の取り扱いを比較しました。「開隆堂」は、ピクトグラムという、駅や空港、オリンピックの競技にも使用されている絵文字だけで何の説明もなくともきちんと伝わる技術のことを説明しています。また、商品のパッケージや、ハサミの形(左利き用と右利き用)、あるいは握力の強くない方のハサミ等の形や材質等へのこだわりもしっかりと説明し、子ども達にメッセージとして伝えてあげることが、美術の科目としては大事だと思いました。「光村」は、冒頭で「美術って何だろう」と問いかける設問があります。美術作品はどう見るのか、今までの図画工作とどうつながっているのか、中学校は何が違うのかを、最初の部分でしっかりと説明しているのが良いと思います。造形でいうと、形や材質等についてコップを題材する等、日常生活にあるもので、美術の要素をしっかりと子ども達にメッセージを伝えてあげることが出来ているのも、「光村」の1番の特徴だと思います。和紙やトレーシングペーパーといった材質を教科書のページで表現して、子ども達に触らせてあげる部分も際立っていると思います。「日文」も、漫画の魅力や鉄道のデザインという他の教科書にはない題材もあって、世の中でいろいろな視点で美術が繋がっている、役立っていることを伝えている部分も良いと思います。やはり「光村」の美術そのもの問い掛けや、日常生活との接点を子ども達に見せてあげられている部分と、芸術作品や国宝といった作品の意味、意義というのをきちんと伝えてられている部分の両方を兼ね備えているという点で、「光村」が良いと感じました。

(教育長)「光村」の意見多数を受け、各委員に美術の美術の「光村図書」について諮る。委員全員異議なし。

〔保健体育の保健体育〕

- （渡辺委員） 保健体育は4社ありました。保健体育は授業時間の都合上、教科書の内容全てを授業で網羅するという事は難しいと感じますが、思春期の子ども達にとって心や身体のことや、人に言えない様々な悩みも多い年頃なので、そのような興味関心の先を丁寧に記述した教科書が良いと思いました。飲酒やタバコ、薬物乱用等の危険性というのが非常に上がってきていますが、そこに関しては4社ともしっかりとページを割いていると感じました。「大修館」が良いと思ったのですが、中でも自己形成の内容で、思春期を経て理想の自分、現実の自分、ありのままを受け入れながら、少しずつ形作られていくという丁寧な表現がすごく良いなと感じました。今年はコロナの感染症のことで、感染症がトピックに上がっています。感染症対策では、元々体が持っている免疫力や抵抗力等について触れているのも大事な視点だと思いました。また、「東書」はスポーツの捉え方が年々変わってきています。競技スポーツだけでなく、生涯に渡る楽しいものへと変化しているというスポーツの定義の部分が4社ともに載っています。その中でも様々な視点や立場でスポーツに触れている「私とスポーツ」というページが、本当にたくさんの人の多様な視点が入っていると感じました。そしてスポーツ障害の事例、野外スポーツの安全対策等も幅広く扱っているところが良いと感じました。
- （岡野委員） 「学研」と「東書」の2つが良いと感じました。実は私の中では4社とも拮抗していて、どれも捨てがたいと感じました。保健の場合は、自分の心と身体としっかりと向き合えるかということ、他者との違いを認識できるかといったところがポイントだと感じました。「学研」の一番のポイントは、心の悩みについて語るときの相談の窓口や、誰にどのように相談したらいいのかを、冒頭で取り扱っていました。他の教科書会社では、いじめや心の悩み等を単元としては取り扱っていますが、ページの真ん中辺りに埋もれてしまっており、探していかないと窓口が分かりません。そういった点で、冒頭に書いてあるのがメッセージ性としては強いと感じました。「東書」については、心の問題について、コップから溢れた水という表現をしていて、イメージとしてしっかりと伝わりやすいです。また、自分のことを考えるためのチェックボックスがあり、一つ一つ丁寧に分解して考えることが出来るというのが良いところだと思いました。「大日本」はページの使い方、特に見開きで左側のページに説明の文章が載っていて、右側が全部資料の構成になっています。見開いたページの使い方が、結構見やすいと感じました。「大修館」は、いじめのところにボリューム割いています。内藤大助さんのコラムでは、「友達がいつもと違った様子だったら君ならどうする」という問い掛けがあって、自分だけではなく、人を労わるという視点もしっかりと盛り込まれている部分もポイントだと思います。「学研」は、単元の中でいろいろなコラムが載っており、どこかにまとめて載っているのではなく、単元を読む時に関連したものがすぐ横に載っているのが、配置が絶妙だと感じました。例えば、「ストレスの対処法も一つではなく様々な視点で見る」という部分があります。自分の心、気持ちの問題にどう立ち向かうかという視点が丁寧に書かれている印象を受け

ました。冒頭にお話しした自分の心と体にきちんと向き合えるかという視点で見て、やはり「学研」が1番良いと感じました。

- （野谷委員） 1番が「学研」、2番が「東書」です。個人的には「東書」が気に入っています。「東書」には、QRコードが150個ありました。もちろん他へのリンクもありますが、自社でしっかりと自作しているところが、やる気がある、力を込めているなど思いました。「学研」については、採択検討委員会の現場の先生から、保健は時間が限られているため、「学研」を使っていじめなどテーマを絞ってやりたいという意見がありました。総合的に考えて、1番が「学研」、2番が「東書」だと思います。
- （教育長） ご意見を頂きまして、ありがとうございます。今は学研、学研、大修館ときていますけれども、渡辺委員よろしいでしょうか。
- （渡辺委員） 熱中症について、高校で習うため掲載されていない教科書もあるのですが、近年増加しているので、中学生でも出くわすことがあります。「学研」や「東書」だけが複数ページで扱っているのが良いと思いました。

（教育長）「学研」の意見多数を受け、各委員に保健体育の保健体育の「学研教育みらい」について諮る。

委員全員異議なし。

〔技術家庭の技術〕

- （岡野委員） 技術は、「東書」が1番良いと思いました。各社に特徴はありますが、「東書」が1番最新のものをしっかりと扱っていると感じました。実際の技術開発や、技術を使った世の中の動きを的確に捉えていますし、その資料の先進性や中身についても、かなり最新のものが丁寧に取り扱われている印象を受けました。冒頭に出てくる技術の見方や考え方という項目で、実際の技術開発の仕組みというのを丁寧に説明しています。教科書では最適化や制約条件という言葉になっているのですが、社会の要求や安全性、経済性、それから環境に関連した廃棄の問題等、いろいろな視点で物が開発されていることが、しっかりと丁寧に表現されている部分が1番の特徴かなと思いました。そして「技術の最適化ってなんだろう」という問い掛けがあります。テクノロジーの未来を考えていくときに何がベストかということですが、価値観はその時々によって変わるものなので、その価値観をたくさん持っていてどれが重要かというのを、きちんとその時代に合わせて考えていくことが大事であると感じました。そういった視点で単元が構成されているというのが1番の特徴と感じました。
- （野谷委員） 同じく、「東書」を推したいと思います。ページの下に「技術の工夫」という豆知識があり、学習事項がどのように社会とつながりがあるかが明確に分かります。また、技術の場合は様々な製作があるのですが、製作の工程表を作るときに、具体的で分かりやすく、やはり子ども目線に立っていると感じました。また、プログラミングの学習

では、二宮町は MESH を使用しているのですが、教科書では様々なプログラミングの例示を3つ程挙げています。そのような点でも充実しているので、「東書」を推したいです。

- （渡辺委員） プログラミングのことも含め、「東書」は複数の掲載があるので良いと思います。

（教育長）「東書」の意見多数を受け、各委員に技術家庭の技術の「東京書籍」について語る。

委員全員異議なし。

〔技術家庭の家庭〕

- （渡辺委員） 家庭科ですが、2017年の総務省の統計で知ったのですが、標準世帯と言われる専業主婦と子どもが2人というような家庭というのは、今は全体の5%もいません。共働き世帯や母子家庭、父子家庭といったひとり親家庭というのがすごく増えている現状です。そのように社会が変化していく中で、調理が出来なくても食べ物を簡単に得られ、100円あれば雑巾が何枚も買えるような時代なので、家庭科が出来なくても困らないと思う子ども達もいると思います。そんな時だからこそ、実践的に、体験的な活動を通して、知識やスキルを身に付ける重要さというのを感じています。そのような視点で3社を見てみると、「教図」が良いと思いました。分厚く、重い部分もありますが、レシピの見方や作業のしやすさ、実物大の写真も使用していて、本当に1冊での活用度が高いなと思いました。中学校の3年間だけでなく、高校生、それから大人の目線から見ても、非常に実用性が高いです。そのような点で、これから大人になっていく中で、使用していけると思いました。また「開隆堂」は、社会の変化に伴う家族の形の多様性や、里親制度等、幅広い視点が入っています。また18歳成人に向けた、消費者としての意識の啓発等も載っていて、そういったところは良いなと思いました。
- （岡野委員） 家庭科は「東書」が良いと感じました。家庭科は単元の並びが各社違って、「東書」は1番に衣食住で、2番に消費生活、3番に地域家庭が来ています。これは他の科目との関係性を考えると、例えば中学校1年生に入ると、生活リズムというのが一気に変わっていくように感じます。特に、スマホを持ち始めたりすることで、生活リズムが崩れる瞬間だったりします。そのような意味で、生活リズムや食生活等を、まず1年生の内にやって、生活リズムの大切さというのをきちんと勉強するのが大事だと感じました。保健体育とのつながりという視点からも大事だと思います。後半の消費生活や、家族や地域というのは、公民との接点はかなり強い内容になっています。途中のページの下側に、定規が付いているのも実用性や、写真が1番きれいで食べ物が美味しそうに見えるという視点も含め、他の科目との関連というのをしっかりと考えた並びになっているのが良いと考えて、「東書」が良いと思います。
- （野谷委員） 「東書」にも良いところはたくさんありますが、「教図」を推したいと思

います。料理は手順が縦になっていて見やすく、まさにレシピ本を見るようでとても使いやすいからです。渡辺委員から、将来も持っていたい本という発言もありましたが、まさにその通りだなと思いました。それに加えて、QR コードの動画も充実しているということも挙げたいと思います。それから環境に及ぼす問題は、どの教科書も扱っているのですが、一歩踏み込んでいるところが素晴らしいと思います。具体的には、フェアトレードのところに「美味しいチョコレートの秘密」というのがあります。安いチョコレートの理由は何かというものです。今朝の朝日新聞にも掲載されていましたが、児童労働といった後進国の安い労働の支え、あるいは植民地の歴史等への問題にも、理解が深まるきっかけをつくってくれます。言葉だけではなく、一歩踏み出している内容なので素晴らしいと思いました。

- （教育長） 検討委員会からの方も「東書」と「教図」の2つで意見が出ていましたので、意見をまとめると、「教図」の方が2対1で、私の意見も追加すると3対1になるのですが、岡野委員よろしいでしょうか。
- （岡野委員） 先程の単元の並びについては、例えば先生が授業をするときに、必要に応じて入れ替えることが可能であると考えれば、その並びは優先度が落ちるのかなと感じます。先程はそこが特徴だと言いましたが、後々使える資料性やデータの量の問題、クオリティも含めて、そういった視点で見て、やはり他のところもそれぞれの良さはあるので、皆さんのおっしゃる方向で良いと思います。

（教育長）「学図」の意見多数を受け、各委員に技術家庭の家庭の「教育図書」について語る。

委員全員異議なし。

〔外国語の英語〕

- （渡辺委員） 二宮町では数年前から英語に力を入れているので、採択検討委員会の中でも、必然性を持ったコミュニケーションを重視していく授業になっていると聞いています。そのような状況の中では、生きた英語の習得と文法知識のバランスのある教科書が良いなと思いました。「開隆堂」と「光村」は、自然な入りで会話が始まっているのがすごく特徴的だと思いました。特に、「光村」はQR コードがすごく豊富で、ほぼ毎ページに付いています。ヒアリングを繰り返し何度も聞けるので、自習の中でヒアリング力を高めるには非常に良いと思いました。また、「東書」は目次を見ることで、全体の目的が分かりやすくなっています。必然的なコミュニケーションやスキルのための英語という中でも、やはり文法をどう学ぶかも大事だと思うので、それぞれの目的の中で何の文法をここで学ぶのが分かりやすいと思いました。また、発音記号を丁寧に扱っているのも、特徴だと思います。「東書」と「光村」の読解力を鍛えていく長文での発問の仕方では、「この文章を聞いて、書いてある順に並べ替えましょう」という従来の長文の読解だけではなく、

少し国語的な発問の仕方がされており、そのような深い部分が良いと思いました。「光村」と「開隆堂」、「東書」あたりが良いと思います。

- （岡野委員） 「光村」が良いと思いました。英語の場合は、文法等もあるのですが、そもそもコミュニケーションの道具だということを前提に考えた方が良いと考えます。私自身も、実際の仕事の中でコミュニケーションをとるために、なんとか会話は繋いではいけると思いますが、最後の最後は根性だったりもします。そういった意味で、「光村」はしっかりと対話が成り立つよう、体に実践力として染み込ませることが出来る感じがしました。扱われている題材も流れがスムーズで、いきなり対話が始まるのではなく、朝の登校風景からシナリオが始まったりもしています。やはり一日の生活の中で、その瞬間に意味や意義のある対話の練習、コミュニケーションの練習ができると感じました。そして「光村」は、対話する時のポイントとしてスマイル、アイコンタクト、クリアボイス、レスポンスを挙げています。きちんと相槌を打つ、目を見て対話する時等が書かれているのが、大きな特徴だと思いました。1番のポイントは、2年生の見開きの後ろにある、「英語の成長曲線」というものです。時間と上達度があって、点で直線が描かれており、2年生の真ん中のところで少し緩やかになっているのですが、その後にぐっと伸びます。あのグラフを見た時に、もしかしたら1年生か2年生に入った時に、伸び悩む子がいると思います。そこをじっくり構えて、我慢して乗り切るとその後ぐっと伸びると、「頑張れば必ず出来るようになる」という強いメッセージがそこに込められているように感じました。対話をきちんと進めていく上で、間違いを恐れずに取り組もうという言葉もあります。やはり英語に対し、臆病な日本人の性質というのはあるのですが、そこを乗り越えて上達していきましょう、というメッセージが込められているのもポイントとして1番大きいと思いました。

- （野谷委員） 「光村」を推したいと思います。中学1年生の単元が、「1. 初登校」、「2. 部活動」、「3. もうすぐ夏休み」、「4. 転校生」、「5. 学校公開日」とあります。これから中学校で慣れていく生活リズムにピッタリ合っていて、そこで使用する英語が取り上げられていることが秀逸だと思いました。そしてQRコードも充実しています。若干レベルが高いと感じますが、やはり「光村」だと思います。

（教育長）「光村」の意見多数を受け、各委員に外国語の英語の「光村図書出版」について諮る。

委員全員異議なし。

〔特別教科の道徳〕

- （岡野委員） 道徳は非常に悩みました。結果から言うと、「東書」と「光村」あたりで悩みました。「教出」も非常に捨てがたいです。道徳の場合は、4つ位のポイントがあると思います。1つ目は「しっかりと自分を見つめること」、2つ目は「相手を見つめるこ

と」、3つ目が「もう少し大きな集団と関わること」、最後がもう少し崇高なもの「命とは何か」等の4段階があると考えました。それぞれのポイントでしっかり考えていける構成になっているのが、今言った3つの会社です。基本的には単元の設問がシンプルで、じっくり考えていけるものが良いと思いました。「東書」の設問が非常にシンプルで、まず1つ目に「その単元について考える」、2つ目に「自分だったらどうするか」という、自分自身に置き換えて考える設問が用意されています。今回の道徳の教科書では、新たにもう一段深い、「話し合いを通じてもう少しじっくり考える」というアクションの設問のページが追加されていました。特徴的だったのが、いくつかの小さな単元をまとめて1つの大きなテーマとして取り扱うといったユニット化のような構成がされていました。いろいろな視点で、友達と一緒に話し合いながら学んでいける構成になっているのが1番特徴的だと思います。記事として、多様性や公共性等いろいろな視点が含まれていると思うのですが、新聞の投稿の記事を扱っているページがあります。新聞の投稿やSNSの書き込みでは雑多な意見が混ざっているので、それをいろいろな視点できちんと捉えて考えていける視点が良いと考えました。また、チームワークの単元で、「皆で跳んだという大縄跳び」が題材になっているものがあります。今、二宮中学校の体育祭の最後は大縄跳びなので、彼らにとってはものすごく実践的で、直接関わりのある単元の構成になっていると思います。次に、「光村」は学びのシーズン化という構成になっていて、かたやユニット化、かたやシーズン化といった成長を実感出来るような構成になっているのが特徴かなと思います。どこかの学年に「自分の窓」というページがあって、「自分が気が付いていること」、「自分が気が付いていないこと」、「他人から見て自分がどう思われているか」、「他人から見ても見えない自分」といった4象限の内、自分はどこにいるのかを考える単元があります。これは、人からも認められていて、自分もそこが強みだと分かっている状態がベストだと思っています。それががちり一致している瞬間が一番良いのかなと考えたら、そういう視点で考える単元を盛り込んでいることは大事であると感じました。そういう点で、「光村」の内容も捨てがたいと思います。「教出」については、単元の内容もさることながら、写真が醸し出すメッセージというのが強い印象を受けました。写真のクオリティが、やはり良いと思います。セッターの竹下さんのトスを上げる瞬間を後ろから撮った写真や、5万回斬られた男、福本清三さんの時代劇の斬られる瞬間のバックショット等、写真が伝えるメッセージ性がすごく強いと感じました。ハゲワシと少女の写真も代表的なものだと思いますが、やはりプライドを持って仕事をしていく、何か1つの事に打ち込んでいくことのメッセージ性を強く訴えるものとして、写真の取り扱いに対する意気込みを強く感じたのが「教出」でした。他の教科書会社もそれぞれ良いところもあるのですが、そういった視点でその3つが良いと感じました。

- （渡辺委員） 「光村」の冒頭の中で、「道徳の何をどうやって何故学ぶのか」という部分が非常に丁寧に書かれているところが良いと思いました。また、道徳は話し合い活動が生まれやすい教科だと思うのですが、その活動の前に自分がどう感じるか、自分の心情を

読み取ることがすごく大切だと考えるので、読み物として深く染み入る紙面構成になっているのが良いと思いました。ただ、「東書」も道徳が採用されてまだ2年しか経っていない中で、「心情円」を使ってどのように話し合い活動をしていくか、学校の方でも研究が進んでいるという採択検討委員会からの意見も出ていましたし、変えてしまうのはどうかなというのもあります。前回、「東書」を採用した時に、非常に設問がシンプルで考えさせる、話し合い活動が生まれやすい部分も大事だと思うので、そのどちらかが良いと思います。

- （野谷委員） 渡辺委員の発言にもありましたが、採択検討委員会の中で二宮での実践をスタートしたばかりなので、同じ教科書を使い続けたいと意見があったため、流れとしては「東書」だと思います。個人的には、読み物は「光村」のレベルがとても高いと思っています。教育委員としては、「東書」を推したいと思います。
- （教育長） ありがとうございます。光村図書と東京書籍ということですが。
- （野谷委員） 1点付け加えます。最初から目標があると、子ども達はそれを目がけ発言するが、そうではなく予め目標を出し過ぎない「あかつき」が、採択検討委員会では好感が持てたという意見もありましたので、紹介します。

（教育長）「東書」の意見多数を受け、各委員に特別教科の道徳の「東京書籍」について諮る。

委員全員異議なし。

（教育長） 各委員に、審議した結果を議案第7号として諮る。

委員全員賛成により、議案第7号は承認される。

（3）議案第8号 令和3年度小・中学校使用学校教育法附則第9条による教科用図書採択について

（教育総務課長） 令和3年度小・中学校使用学校教育法附則第9条による教科用図書採択について資料に基づいて説明

（指導班長） 教科用図書の採択について、これまへの経過を報告。

意見等なし

（教育長） 委員に議案第8号について諮る。

委員全員賛成により、議案第8号は承認される。

5 報告・協議事項

- （1）二宮町児童生徒就学援助費交付要綱の一部を改正する要綱について

(教育総務班長) 二宮町児童生徒就学援助費交付要綱の一部を改正する要綱について資料に基づいて説明。

意見等なし

(2) 二宮町準要保護者昼食代援助費交付要綱について

(教育総務班長) 二宮町準要保護者昼食代援助費交付要綱について資料に基づいて説明。

意見等なし

(3) 令和2年度二宮町学校給食費取扱い特別要綱について

(教育総務課長) 令和2年度二宮町学校給食費取扱い特別要綱について資料に基づいて説明。

意見等なし

(4) その他

— 次回教育委員会予定 —

(教育総務班長) 次回教育委員会議の日程及び出席を要する主な行事について説明。

— 傍聴者退席 —

4 付議事項

(4) 議案第9号

— 非公開 —

13時00分 閉会